

笠栄治氏著 『陸奥話記校本とその研究』

井手, 恒雄

<https://doi.org/10.15017/12248>

出版情報 : 語文研究. 23, pp.64-64, 1967-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



笠榮治氏著『陸奥話記校本とその研究』

井 手 恒 雄

本書の著者笠榮治氏は、好学の士である。はじめ福岡学芸大学に学び、さらに志を立てて九州大学大学院に進み、博士課程を終えられた。今日に至るまで、専門の研究はいわゆる軍記一本で通され、かの蔵島神社蔵本平家物語に関する業績など、平家物語諸本の研究にたずさわる多くの人々の知るところである。本書は、その題の示すとおり、陸奥話記の最善の校本を学界に提供しようという野心に基づくものである。若干の研究が添えられているが、その研究はすべて校本そのものを作成せんがための研究であり、本書は一言でいえば校本としての価値を世に問うものである。

陸奥話記の書写本は比較的多いが、著者の現在までの調査ではいづれも江戸時代に入っているものばかりである。室町以前の写本は見当たらない。刊本が『奥羽軍志』として四冊本で出版されたのは寛文二年で、刊本の奥書、出版書籍目録等一致するのでまちがいはないと思われる。書写本の古いのもほとんどこ

のころのものと思われる。諸本が、原本の成立後六百年を経たものであり、書写本に善本を得なかつたことが、陸奥話記研究の遅れの最大の因である——。著者は、今日まで調査した諸本の幾つかをあげて、その紹介と系統づけを試みる。「諸本研究の緒を提供できれば」という、謙虚な姿勢である。

校本作成にあたって取り上げられた諸本は、群書類従巻第三百六十九所収本、寛文二年刊奥羽軍志所収本、神宮文庫所蔵本、松平文庫所蔵本、尊経閣所蔵后藤氏書写本その他で、諸本の本文および字体が、著者の鄭寧な筆で忠実に写されている。その点、著者の刻明な性格がしのばれる書物でもある。

陸奥話記については、作品研究の基礎となるべき諸本を校合して定本を定める作業だとか、本文の注釈とかいった仕事すら全く試みられていない状況（加美宏氏）であるという。著者が多年にわたる調査研究をまとめて一冊の校本として公刊されたことの意義は大きいというべきであろう。

著者笠氏に今後望まれることは、本書に示された調査研究の労苦を踏まえてさらに陸奥話記そのものの生命に触れる研究業績を世に問われることである。国文学の研究というものがそういうものであるべきであろうと思うのであるが、著者自身は、私信によれば、将門記、平治物語等々の校本作成に、ひきつづき精力を傾けるつもりであるという。それもあるいは可ならんか。

「貞任が首を梳った担夫の話」（五九ページ）などという、やや古風な言い方などは、改められるべきであろう。

（昭和四十一年三月桜楓社発行 三三八ページ 定価二二〇〇円）